音楽科における思考力・判断力・表現力

本年７月，文部科学省・国立教育政策研究所が「特定の課題に関する調査（音楽） 調査結果（小学校・中学校）」を発表した。いわゆる「音楽の学力調査」とよばれるものである。このような全国的な規模での学力調査は，小学校では実に42年ぶりで，中学校では初めてであった。また，実技についての調査や，学習内容に関連した児童生徒の意識や，教師の指導の実際等に関する質問紙調査もあわせて行なわれた。多角的な視点から，小・中学校における音楽科の実態を把握するための示唆に富む情報となっている。

このなかで特にうきぼりになった点は，習得している基本的な知識や技能をもとに，自らの思いや意図をもって工夫して表現しようとする力，音楽の全体を把握する力，感じたことを言葉で説明する力などの不足であった。これは「音楽の思考力・判断力・表現力」に直接つながる力にほかならない。

そこで，音楽科では研究テーマとして「学び合いの中で思考力・判断力・表現力を育む音楽学習」を設定した。内容のまとまりとしては，平成20年度に「歌唱」，21年度に「音楽づくり」，「創作」を中心に取り上げたことをふまえ，今年度は「鑑賞」を中心に計画を立てることとした。これまでの取り組みで留意してきた点は，「思考力⇔判断力⇔表現力」のように，それぞれの力が一方通行ではなく，相互にフィードバックしながら，より高い段階に発展していくものととらえた点である。「行きつ戻りつ」を繰り返し，総合的に音楽の学力を高めていこうとするこのサイクルを，音楽科の共同研究チームでは「往還」とよび，重視してきた。

今年度は，この「往還」をより有機的に発展させるために，仲間との学び合いのなかで力を育む授業設計を模索した。附属学校における児童・生徒の音楽の授業に対するレディネスとして，しばしば指摘されることに，教科外，また学校外における音楽経験の豊かさがある。具体的には合唱やオーケストラ，吹奏楽等，学校における課外活動に加え，学校外ではピアノをはじめとした音楽の習いごとや民間の音楽サークルやグループへの参加などがあげられる。このような傾向が顕著であることは，授業者や大学教員はもとより，多くの学校関係者や地域の人々が認めるところである。ただ，教科の外で培った力が，音楽の学力としてバランスの取れたものであるかどうかは別問題である。その意味で，筆者は，附属学校における音楽の授業研究で，ポイントとなるべき点のひとつは，児童・生徒の個人的な音楽経験に依存しない授業の設計にあるのではないかと思っている。仲間との学び合いが，個人の音楽経験に過度に左右されることなく，新鮮な発見や感動を共有し，既存のものの焼き直しではない，真にクリエイティヴな音楽活動を模索する原動力となるはずである。さらには，音楽を通して他者の個性を認め，協同の醍醐味を体験することで，よりよい人間関係を構築する力にもつながっていく。

具体的な題材には，我が国や郷土の音楽を取り上げた。題材は初等部で「おはやしの音楽の特徴を感じ取ろう」，中等部で「日本や諸外国の伝統音楽が生み出す声の音色の特徴を感じ取ろう」をそれぞれ設定した。我が国や郷土の音楽を鑑賞の授業で扱う試みは，授業外での個人的な音楽経験に比較的左右されにくいのではないかという仮説に立っている。この点に関連して，権藤敦子は「教科の論理から捉えた学習集団の組織化―音楽科の視点から―」と題した論説で，「学習内容と子どもたちのかかわりあいを結びつけた教材研究と教材づくりが非常に重要である」と述べている（『学校教育』2008年９月号，広島大学附属小学校学校教育研究会）。ここで権藤は，箏や和太鼓など日本の伝統的な楽器の演奏を学習する過程を例に，「普段の『できる』『できない』，『わかる』『わからない』を逆転させ，子どもたちのかかわりのなかで，ドレミの音楽とは違う音楽文化のおもしろさへと巻き込んでいく」と，学習集団ならではの学びの姿を示している。

鑑賞を中心とした授業としては，新しい学習指導要領に基づき，学力の具体的な指標となる共通事項をきちんとおさえることと，言語活動の充実につなげる手立ての工夫にも留意した。ご参観くださった皆様の率直なご意見，ご感想をうかがいたい。

（共同研究者：島根大学教育学部芸術表現教育講座　藤井　浩基）